

『不思議の国のアリス』 作 ルイス・キャロル

構成・脚色：studio_03

① 【うさぎの穴をまつさかさま1】

アリスは川辺でおねえさんのよこにすわって、なんにもすることがないので、
ても退屈しはじめていました。一、二回はおねえさんの読んでいる本をのぞい
てみたけれど、そこには絵も会話もないのです。

「絵や会話のない本なんて、なんの役にもたたないじゃないの」とアリスは思
いました。

そこへいきなり、ピンクの目をした白うさぎが近くを走ってきて、「どうし
う！ どうしよう！ ちこくしちゃうぞ！」とつぶやいたのです。

チョッキのポケットから懐中時計をとりだして、そしてまたあわててかけだ
したとき、アリスもとびあがりました。

興味しんしんになったアリスは、あとを追っかけて野原をよぎって、うさぎ
がしげみの下の、おつきな穴にとびこむのを見つけました。

次のしゅんかんには、アリスもそのあとを追っかけてとびこみました。

② 【うさぎの穴をまつさかさま2】

するといきなり ウサギあなに おつこちちゃって。

ずっと ずっと おちつづけてね。 ぴゅーううーううー

このまま せかいを まっすぐ つきぬけて、うらがわに でちゃうんじゃない
かって アリスは そんな きがしてきて！

あなは ふかい ふかい いどみたいなのに おみずは ぜんぜん なくて。

こんなところへ ほんとに おちちゃったら どんなひとだって きつと しん
じやう。

それでも いつかは あなのそこに たどりつくわけで、アリスは うずたか
く つまれた おちぼと えだのうえへ どすん。

けがひとつ なく ぴよんと おきあがると また ウサギのあとを おいか
けたんだ。

こうして アリスの へんてこな ゆめが はじまったってわけ。

③【アリス ちっちゃく】

そのちーつちな ドアを あけて、 しゃがみこんで なかを のぞきこんだ
んだけど、 なにが みえたと おもう？

もう とーつても すてきな おにわで！ そこに いきたくって いきたくつ
て！なのに ドアが ちっちゃすぎるんだ。

からだを おしこんでも とてもむりで。 きみが ねずみの すあなには
いれないのと おんなじこと！

すると そこにさつきまで なかったものが あるってことに きがついたんだ。
いったい なんだと おもう？

こびんだよ。 ラベルが ついていて そこには 「ノンデ」の もじ。

そんなわけで くちをつけてみる。

とつても おいしくて、 あらためて いっきのみ。

すると アリスが ちいさく ちいさくなつていつて、 さいごには ちっちゃな
おにんぎょうさんくらいの おおきさに なったんだ！

④【アリス おつきくなりすぎ】

「あら このおおきさなら ちいさな あのドアも うまく とおりぬけられ
てよー」つてことで はしりだす。でもね たどりついた ドアは あかないわけ
で、 かぎは テーブルのうえ、 しかも これじゃあ とどかない！

どうして しつかり とじまりなんか しちゃったんだろう！

はてさて、 そこで また みつけたのが ちっちゃな パンケーキ。

こんどは こげあとが 「タベテ」つて ことばに なつて。

なので さっそく たべて ぜんぶのみこんだ。 そのあと どうなつたと お
もう？

アリスは おつきく おつきーくなつていつてね。 せなんか もとよりも た
かくつて！ こどもよりも おとなよりも ぐんぐん によきによきと おつき
く！

いったい どっちがいいと おもう？ ネコちゃんくらいの おおきさの ちっ
ちな アリスと、てんじょうに あたまを ぶつけっぱなしの おつきな アリ
ス。

⑤ 【チエシャねこ】

森にむかつていったとき、何メートルか先の木の太さに、あのチエシャねこがすわっていたので、アリスはちよつとぎよつとしました。

ねこは、アリスを見てもニヤニヤしただけです。

とつてもながいツメに、とつてもたくさんの歯をしていたので、アリスはちゃんと失礼のないようにしないと、と思いました。

「チエシャにゃんこちゃん。おねがい、教えてちょうだい、あたしはここからどこへいったらいいのかしら」

「それはかなり、あんたがどこへいきたいかによるなあ」

「ここらへんには、どんな人がすんでるんですか？」

「あつちの方向には帽子屋がすんでる。それとあつちの方向には三月うさぎがすんでる」とかたほうのまえ足をふりまわします。

「好きなほうをたずねるといいよ。女王さまときよう、クロケーをするの？」

「したいのはやまやまだけど。でもまだしよたいされてないの」

「そこで会おうね」といって、ねこはとてもゆつくり消えていきました。

しつぽの先からはじめて、ニヤニヤわらいは、ねこのほかのところが消えてからも、しばらくのこっていました。

⑥ 【おかしなお茶会】

ひとつのテーブルが家のまん前の木かげにもうけられてあつてね、三月うさぎとぼうし屋がそこでお茶のまつ最中。あいだにはヤマネもすわっていて、ぐっすりいねむり。

テーブルはでっかいのに、3人はすみっこにぎゅつと集まっていますね。

「席ならもうないぞ！」と、みんな、やってきたアリスを見つけて声を上げる。

「いっぱいあつてよ！」とぶんすかアリス、そうしてテーブルのはしにあつた大きなアームチェアにどしん。

「ワインでも飲め。」と景気いきびげに三月うさぎ。

テーブルをぐるっと見回したけど、そこにあるのはほんのお茶だけ。

「どこにワインなんか」

「どこにもねえ。」

「とんだ無礼者ぶれいものね、ないものをすすめるなんて」

「てめえこそ無礼者だ、さそわれもしねえのに、すわりやがつて」

「まさか3にんだけのテーブルだなんて。空いてるところもずいぶんあるけれど」

ぼうし屋はこれを耳にして目を丸くしたんだけど、「カラスとかけて勉強機ととく、その心は？」

「ふうん、ちよつと面白そうじゃない！ のぞむところよ、なぜかけなら——あれね、ええと、もうすぐわかりそう」とわざわざ声に出す。

「それはつまり、もう答えがわかるってえことか」と三月うさぎ。

「その通りよ」

「じゃあ、わかつたつてことは、言えるんだろうな」

「だから、そのうち言えるつてことはわかつたの！ 同じでしょ」

「同じなものか！」とぼうし屋。

⑦ 【おかしなお茶会2】

ぼうし屋が「今日は何日かね」とアリスの方を向く。ポケットから時計を取り出して、それをまじまじ、時おりたびたびゆすぶって、耳に当ててみたり。

アリスはちよつと考えたあと、「4日」。

「2日くるつておる！」とぼうし屋はため息。

「面白い時計だこと！ 時をつけずに日をつげるなんて！」

「何を言うか」とこぼすぼうし屋。「きみの時計は年をつげたりせんדר？」

「当たり前。だつてそれだと1年間ずつと同じじゃないの」

「それはこちらのつて同じこと」とぼうし屋。

アリスはひどくもやもやした気持ちになつて、「おっしゃること、よくわからないんですけど」とできるだけいいねいに言い返す。

「さっきのなぜかけはもうわかつたかね？」と言いつつぼうし屋はまたアリスの方を向く。

「いいえお手上げ」というのがアリスのお返事。「答えは何？」

「これっぽちもわからん」とぼうし屋。

「おれも」と三月うさぎ。

アリスはやれやれとため息。「もつとまじなことができてよ。そんな答えのなにぞかけで時間をつぶすだなんて」

⑧【クイーンのおにわ】

お庭の入り口には、おおきな白バラの木が立っていました。

そこにトランプの形をした庭師が三人いて、バラをいっしょうけんめい赤くぬっていました。

「ちよつとうかがいますけど」とアリスは、こわごわきいてみました。「なぜそのバラにペンキをぬってるんですか？」

五と七はなにもいわずに、二のほうを見ます。二は、小さな声でこうきりだしました。

「ええ、なぜかといいますとですね、おじょうさん、ここにあるのは、ほんとは赤いバラの木のはずだったんですがね、あつしらがまちがえて白いのをうえちまっただんですわ。それを女王さまがめついたら、みーんなくびをちよん切られちまいますからね。だもんでおじょうさん、あつしらせいっばい、女王さまがおいでになるまえに——」

このとき、お庭のむこうを心配そうに見ていた五が声をあげました。

「女王さままだ！ 女王さままだ！」

そして庭師三名は、すぐに顔を下にはいつくばってしまいました。

足音がたくさんきこえて、アリスは女王さまが見たかったのでふりむきました。

⑨【だあれが タルトを ぬすんだの？】

おさばきが おひらきになつたところ。

キングが 12にんに「ハートの ジャックの ゆうざい むざいを きめろ」といつてね。

つまり タルトを ぬすんだのは そいつなのか、ほかの やつが たべたのか きめるって ことなんだけどね。でも いじわるな クイーンは とにかく「おしおきする！」って さきに きめたくつて。

こんなの ただしくないよね？ だって ほら、タルトを ぬすんでないんだ ったら もちろん おしおきなんか だめだし。

だから アリスは いったんだ。「がらくたの からっぽ！」

すると クイーンは 「こやつの くびを はねよ！」

で アリスの へんじ。「あんたたちなんか こわくない！ ただの トランプ

じゃないの！」

となると みんな ふんすか。

ちゆうにとびあがつて アリスのうえへ みんなして ふりかかつてきました。まるで ざあざあにわかあめみたいに。

そこで アリスは このへんてこな ゆめから めが さめたんだ。

きづいたら トランプは ただ きから おちてくる はっぱに なってて、
かぜが びゅーんて かおのほうへ ふきおろしてきましたとき。

※原作より一部、studio_o3が朗読用に構成しています。

翻訳の底本：

• Lewis Carroll (1890) “The Nursery ‘Alice’”

• Lewis Carroll (1865) “Alice’s Adventures In Wonderland”

翻訳：大久保ゆう、(C) 1999 山形浩生